

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0473100410		
法人名	社会福祉法人 涌谷町社会福祉協議会		
事業所名	グループホームゆうらいふ	ユニット名	あさひ
所在地	宮城県遠田郡涌谷町涌谷字新下町浦192		
自己評価作成日	令和4年 10月 21日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	令和5年1月13日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢者福祉複合施設という特性と地域性もあり、民生委員や行政区長をはじめ、一般客の出入りがとても多く、単独のグループホームよりもその点が大変恵まれている。それらの利点を多に活用し日々のケアに取り入れる事を意識しながら、子供達を含むボランティアや学生の実習等も積極的に受け入れ、幅広い年齢層に親まれるホームを目指している。また、他事業所との事業など、人との交流の場が多いことから、認知症の方が地域で暮らしていけるよう家族を含めて理解して頂けるよう努め、高齢者施設だからと内にもったり、閉鎖的になる事が決まらず常に意識しながら取り組みをしている。あくまでも出来ない事を問題にするのではなく、出来る可能性を最大限に生かしていく事を大切に、入居者を中心として常に新しい取り組みを日々実践している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、涌谷町社会福祉協議会が運営する高齢者福祉総合施設「ゆうらいふ」の敷地内に2ユニットがある。面会は時間を決め面会室で家族や友人誰でも可能にし、馴染みの関係の継続に努めている。認知症カフェに参加して地域と交流を図ったり、社協が運営する子育て広場での母子との交流が入居者を励まし和ませている。運営推進会議メンバーの提案で、地区の災害協力員が避難訓練に参加している。職員は入居者の安全、安心な生活に視点を置き、晩酌を認めたり訪問診療を実施する等、入居者や家族の要望を実現している。目標達成計画の水害想定のマニュアルを作成し、非常食の備蓄リストも作成した。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで身体や精神の状態に応じて満足出来る生活を送っている。 (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホームゆうらいふ)「ユニット名 あさひ 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を基本とし、ユニット毎に入居者の状態・季節・介護技術を踏まえた上で年間の個人目標を設定し、毎月確認している。また、目標を振り返る機会を会議時に行い、常にケアの向上に取り組んでいる。	年度初めに、ユニット毎に話し合い「関わりは丁寧、チームワークを大切に」等の分かり易い目標を定めている。入居者とは目線を合わせて会話し、職員の顔を見て安心できるよう、支援に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の研修室等に行っているサークル活動や各種会議の帰りに入居者の家族や知人が訪問してくれたり自然とつながりができている。また、町の文化祭や敬老会行事にも積極的に参加している事に加え、子供たちの慰問や実習、ボランティア活動等で交流は行われているが新型コロナウィルスの影響により最近少し寂しい状態が続いている	行政区長や民生委員が来訪し、地域の情報を教えてくれている。認知症カフェの参加や月1回の折り紙ボランティアの来訪がある。浦谷高校へ認知症の出前講座をしたり、小学校の生徒とオンラインでゲーム等の交流が行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の勉強会や研修会に関わり、介護保険制度や各種サービス形態についての出前講座を行い、事業所での実践内容と経験を踏まえながら認知症ケアについての啓発活動に努めている。また介護職員初任者研修の講師として関わり認知症の理解に努めている。感染症の影響もあるが少しずつオンラインなどで再開している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度も、年間計画通り定期的に開催しているが、感染流行状況により書面開催へ切り替えたりしている。利用者や家族、地域代表の方、町の関係者で行事や運営に関して報告しサービスの向上に努めている。参加者の発案により地域の役員さん方との合同での避難訓練も実施した。	メンバーは町職員や行政区長、民生委員、家族で年6回開催している。会議では感染対策や防災、医療等に関する意見が活発に出されている。避難訓練に地区の災害協力員が参加してはの提案があり実現した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	生活保護を受給している方がおり、不定期ではあるが町の職員が訪問し様子を見に来てくれている。その際に近況報告を行い連携をとっている。また、町や町内の他事業所と協力し認知症カフェを行い意見交換を行なっている。処遇が困難な利用者への対応や利用料支払いが困難な方についても随時相談し助言を頂いている。	町と法人で職員の派遣交流が継続して行われており意思疎通が良い。遠方の家族の代理で介護保険更新で町へ出向いている。地域包括支援センターとは経済困難事例の相談や緊急入所の要請に対応し連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	常に入居者の立場から考え、やむをえず鍵やペット柵を使用する場合にも虐待につながるという認識を持ちケアにつなげている。現在該当する方はいないが、法人全体で組織する委員会で開催し、委員会主導で研修会を開催して身体拘束廃止を目指し取り組んでいる。	月1回、法人全体で虐待・身体拘束防止委員会を開催し、研修会の検討やマニュアルの見直し、事例検討等を行っている。入居者の行動は制限していない。急な立ち上がりや不安定な移動時など声を立てたり、抑止などはせず、見守り、寄り添うように努めている。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様、「常に自分に置き換えて考えたらどうなのか」と入居者の立場からケアを行うことにしている。定期的に内外部の研修会に参加し、虐待についての意識づけを定着できるようにしている。研修に参加できなかった職員に対しても伝達研修を行なっている。定期的に振り返りチェックシートを行い、虐待や身体拘束についての意識を高めている。	年1回、虐待の芽チェックリストを用いてユニット毎に検討している。忙しさの中で「ちょっと待って」や「無視する」ことが挙げられた。職員のメンタルヘルス研修会や嘱託医の面談がある。管理者は年2回面談を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症の進行や身寄りがないなどの事情がある方について、行政や関係機関と連携し、成年後見人制度を利用している方が過去に入居されている。職員間でも関わりながら学ぶ良い機会となった。今後も権利擁護について研修会等で学び知識を得る努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	内容を省くことなく、認知症ケアに対する考え方と取組、緊急時医療連携体制の実際と個人情報取り扱いについて説明し、理解を得たうえで同意をいただくことにしている。利用料金が気になる方が多いので丁寧に説明するようにしている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者が遠慮なく自分の思いを伝えられる雰囲気づくりに努めている。担当者が中心になりそれぞれの好みや思いに気付き、実践できるよう努力している。また家族の思いも大切に、行事や来訪時に問いかけ小さな意見でも話して頂けるように交流を深めている。	入居者から「晩酌したい」要望があり、主治医や家族と相談し実現した。それ以降、帰宅願望がなくなった。家族から「かかりつけ医(協力医)に訪問診療を行ってほしい」という要望があり、協力医と協議し実現した。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスの機会を設けている他、月に一度のユニット会議、臨時介護員会議(不定期)、全体会議にて職員に意見や提案を聞くようにして、より良いケアにつなげていくようにしている	職員提案のドライブや正月のおせち料理が実施された。食器洗い機や衣類乾燥機等を買換えた。遅番の30分繰り上げやシフトの調整が柔軟に行われ、働きやすい環境にある。資格取得や研修参加等支援している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	継続して取り組み成熟したシステムになるにはもう少し時間を要するが、人事考課制度を行い、全職員のスキルアップを目指している。各職種グレード別に取り組みと考課を実践し、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修・講習等に全職員が各自のスキルに合わせ、バランス良く順番に参加できるような体制をとっている。また、法人にて資質向上委員会を立ち上げ、年間の研修が計画・立案されているが最近はオンライン研修が多い。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内で多くのシェアを持つGH協議会に加入しており、見学を含めた学習会や職員研修にリモート会議を含め参加している。他事業所の意見や経験を聞く貴重な時間であり、良い取組事例を現場に還元するように各自職員に周知している	グループホーム協議会の研修会がオンラインで行われ、コロナ対策や最新の情報を得ることが出来た。N95マスクの使用が感染防止に役立っている。法人が感染対策の検査キットやマスク等の準備を迅速に行った。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	最初の面談の時点から、本人の思いを察知し、聞き出せるよう努めている。本人と向き合い、信頼関係を築けるよう取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談時間を十分にとり、不安や要望を聞き受け止めることで信頼関係を築けるように努力している。さらに本人と家族が望むケアに対し、本人の生活歴を伺いながら、事業所としてどのような対応ができるか理解していただけるようにしている。面会なども一律に制限せず、感染状況に応じて柔軟に対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時間に時間をかけ、本人と家族の思いを確認し見極め、他のサービスの利用調整や提案を行うなど その時に合わせた対応に努めている。また、法人内の独自のサービスを契約、利用してもらいながら顧客満足度の向上を目指している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護をする側・される側といった一方的な見方をせず、ともに支えあい、同じ目線での関わり方を意識し職員間で共有するよう努めている		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	専門職として一方的に意見を押し付けず、本人・家族の思いを聞き受け止めることでともに支えていくという信頼関係を築けるように心がけている。要望に対して対応出来ることはすべて柔軟に対応している。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前と環境が極力変化しないように努め、本人の趣味・習慣・生活歴、役割等を継続できる環境を作っている。また協力していただく方々にも認知症を理解していただけるように働きかけている。友人などご家族以外の面会も受け入れるようにしている。	面会は、面会室を設け30分間、家族や友人等誰でも可能にして、多数訪れている。入居者の帰宅や外泊も認めている。受診時に外食して来る方や近所の美容室へ通っている方もいる。月1回馴染みの理美容師が訪れている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共通の趣味や役割活動を通じて、入居者同士が関わりを持てるよう職員が調整役となっている。また毎日のレクリエーションや行事等で一体感を感じられるよう努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院中も機会を得てお見舞いに行くなど関係性を大切にしている。退去後も折をみてご家族の話や相談事に乗れるよう、日ごろから信頼関係を築けるよう努めている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望・意向をくみ取れるよう、日々の関わりを持っている。認知症により訴え・要望が変化されてきていることがあっても家族に伝え、本人を主体としたケアを提供できるよう話し合いを持っている	入居者に、何かしたい事や何か食べたい物を聴き、ラーメンやお好み焼き等の希望に応えている。意思表示の困難な方は、筆談や顔の表情から汲みとり、チラシでゴミ箱を作ったり雑巾を縫うなどしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談時にじっくりと話を聞く機会を持ち、なおかつ入居後も本人・家族とのかかわりを深め、少しでも多くの情報を把握できるように努めている。それらをホームでの生活でも活かせるように支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前からの生活習慣を継続できるよう(起床後の掃除等)、各々の暮らし方を尊重し、残存能力を維持できるよう支援を行っている。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスやモニタリングで全職員が入居者の状態を把握できるよう努めている。本人主体の介護計画を念頭に置き、それらに本人・家族の要望を取り入れ反映できるようにしているが、コロナ禍により本人が満足出来るような行事などが行えていない葛藤もある。	担当職員から報告を受け、毎月カンファレンスを行い、3カ月毎にモニタリングし見直している。本人や家族が安心して生活を送れることを基本としている。酸素療法が必要な方を家族の要望で受け入れ支援している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録システムや引き継ぎノートで入居者の状態把握をすばやく確認し共有できるようにしている。日々の心身の状態変化・気づき・水分・食事量・排泄面を介護記録システムへ時間毎に入力している。違う時間帯に勤務する職員もそれを確認することで情報共有が可能になっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	定期受診の際 提出する報告書以外にも必要時に応じ職員が同行するなど柔軟な対応をしている。できるだけ本人や家族の要望に応えられるよう情報を収集し、サービスの多機能化に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	住み慣れた地域で安全で豊かな暮らしを楽しめるよう、地域の民生委員や行政区長、学校関連・ボランティアに働きかけ協力をいただきながら支援している		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力病院のほか、本人や家族が希望するかかりつけ医を基本的には家族対応で受診している。その際も生活の様子の報告書を提出し、情報伝達を密にすることにより適切な医療が行われるようサポートしている、また、協力頂ける歯科や皮膚科への受診も行っている	家族の要望で、協力医の訪問診療を受けている方がいる。協力医は24時間対応である。歯科医が年1回検診に来訪し、治療が必要な方は受診している。法人の看護師が健康チェックや相談に応じている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一法人内の看護師を配置し、日常的に入居者の健康管理や必要に応じた援助を行っている。介護職員とも相談や情報交換ができる密な関係を維持している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を含む環境の変化を最小限に抑えるべく、本人および家族の意向を確認し、医療機関(地域医療連携室)とも情報交換しながらできるだけ早期に退院できるよう支援している		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として対応ができる段階の指針を定め説明を行っている。また、対応が可能な最大限のケアについての方針を職員間で検討し、意識の向上と援助方法の統一を図っている。途切れないケアを目指しタイミングが合えば同一法人の特養への移動も対応している	「重度化した場合における対応に係る指針」を入居時に説明している。現在看取は行っていない。重度化した場合、どこまで支援できるか家族と話し合い、希望に添う病院や特養など次の移転先への支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人全体で全職員対象に、外部で実施されている救急救命講習に参加している。またグループホームでも定期的に緊急時の対応としてAED取扱いや応急手当等の研修を行い技術の向上に努めている		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回災害を想定した実践的な訓練を実施している。近隣行政区長、地域災害協力員など地域の方々にも協力を頂く体制づくりに努め実際に参加して頂いている。以前当施設が水害による避難指示が発令され、避難した事もあり、近年水害リスクも高いので事業継続計画やマニュアルの見直し等も含めて検討中	夜間想定避難訓練を年2回実施している。併設の特養の職員も訓練に参加し、手順を決めている。車いすやシルバーカーの方も避難した。11月の訓練に地域の災害協力員が5名参加し、訓練の様子を見守っていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(16)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者それぞれの個性や性質を把握したうえで関わりを持っている。人生の先輩として敬うことを第一条件として職員間に周知している	呼び名は名前にさん付けで行っている。目線を合わせて丁寧に話しをしている。背後から肩や背にボディタッチはしないようにしている。入室する場合はノックして確認している。失敗時は速やかに処理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望を上手く言い表せない方に対しても日ごろの関わりから表情や行動で察知できるように努めている。また複数の選択肢を設け入居者が自由に選ぶことができる環境も目指している		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれの一日の生活リズムを把握し、長年の習慣を継続できるように努めている。体調に合わせて食事時間や入浴の時間にも配慮している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員の押し付けではなく、各入居者の個性やこだわりを尊重している。毎朝の服装も本人と一緒に選ぶようし、おしゃれすることの楽しさを感じていただけるよう支援している		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	各入居者が役割を持ち、準備・片づけを手伝って頂いてる。ただ高齢化や重度化による状態の低下で以前のように役割活動が困難になってきている。	ご飯と味噌汁は作り、おかずは業者のチルド食材を利用している。誕生会や敬老会等行事の際には要望を聞き、ちらし寿司や刺身など好みのメニューにしている。100歳の方2名の誕生会に祝い膳を用意した。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事量・水分量を記録につけ把握し、さらに排泄量や体重の変動にも気を配っている。毎月のメニューは、クックチル委託業者の栄養士がカロリー等考え、提供時に個々の状態に合わせて提供している。必要に応じて法人内の栄養士からも助言頂ける環境を整備している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けや洗口液、義歯消毒剤を使用し、口腔衛生の保持に努めている。自力で難しい方には残存能力を活用しながらの支援をしている。また法人で歯科医院と契約して定期健診を実施し、口腔ケアのアドバイスや早期受診等の対応を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各入居者の排泄のパターン・習慣を全職員で把握し、その上で誘導の声掛けを行っている。本人のサインを見逃さないことにより、実際の所、手間はかかるが、状態に合わせて可能な限りオムツからパット、パットから布パンツへ移行できるよう支援している。本人の自立支援を可能にするためにも安易におむつを使用するような視点を持たないように職員へ意識づけしている。	自力でトイレで排泄する方は半数近くいる。車いすを利用したり、排泄パターンで声がけ誘導している。オムツや紙パンツ、パッドの軽量化を図り、トイレ誘導することで失禁を少なくしている。夜間は見守りや足音等で支援している。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	バランスの取れた食事や1日の中で乳製品の提供を行なっている。入浴時のマッサージやレクリエーション時に体を動かす機会を取り入れ、下剤を最小限に抑えできるだけ自然排便できるよう支援している			
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	入居前からの習慣を大切に、入居者の希望の時間に添えるようにしている。入浴を拒む方にも時間を置いたり、職員を交代して声掛けを行うなどし、気持ちよく入っていたりできるように努めている。今はいいが重度化により通常浴槽での入浴が難しい場合は、法人内の特別浴槽で入浴できるように調整し細やかなサービスに対応できるようにしている。	入浴は週2回とし、希望に応じている。午後入浴としているが、晩酌を楽しみにして18時半頃に入浴する方がいる。好きなシャンプーや入浴剤を利用している。入浴が嫌いな方には時間をおいて声がけし、拒否する方はいない。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣に合わせてながら日中のリズムを作り上げ、できるだけ本人の希望に沿った就寝時間の確保に努めている。(テレビ鑑賞や読書時間等)また眠剤を服用している方も徐々に減らしていく事を心がけている。ただ本人が安心感を得るために服用している方もいる。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を個々のケース記録に整理し、薬の内容や副作用について全職員が把握できるようにしている。服薬する際も、二人の職員で確認して間違いを防止している。薬の内容についても主治医の他、院外処方薬店の方に常時間い合わせ確認できる体制を確保している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節ごとの行事や日々の役割活動の中で一人ひとりが知識や生活歴を生かせるような機会を設けている。個々の好みや得意なことを気づき、引き出せるようにコミュニケーションを図っている			
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人一人の希望に沿い、担当職員との個別外出やユニット全体での外出を企画立案している。町内の行事に積極的に参加し、地域の人々との交流を楽しんでいただいているが、新型コロナの感染症で回数は減ってしまっている。	涌谷町城山のぼん馬大会へ見学に行ったり、石巻の大判焼き店の開店に行ってきた。近くのスーパーやドライブに出かけている。ホームの面する道路沿いに見事な桜並木があり、暖かい日には散歩に行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いとして普段は職員が管理しているが、外出時には本人の小遣いとし所持していただき使えるよう支援している。中には家族了解のうえ、少額であるが普段から所持している方もおり、社会とのつながりを断ち切らないよう努めている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望を取り入れ、電話のやり取りをできるように支援している。最近ではリモート面会にも力を入れており喜んで頂いている。また手紙を送る方はいないが、届いた手紙を本人に手渡し読んで頂くように支援している		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地よく過ごせるよう季節ごとに装飾を変え、作成も入居者とともにしている。何が快・不快なのかを探りだし、混乱を招くような刺激がないように努めている	リビングは日当たりが良い。天井の蛍光灯の色が温かみを感じる。壁や窓に正月飾りや干支の兔の折り紙が貼られている。レク活動の他、入居者同士の雑談やテレビ視聴、洗たく物置みなどをして自由に過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	以前は、炬燵を準備していたが、現在は身体機能が低下し和室に上がること難しくなったため、ショートステイ専用部屋へ改築した。今の入居者様は一人になる寂しさを感じる方が多いので自然とリビングに集まって来られる。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には馴染みの家具や小物類を持参していただき、環境の変化による不安や影響を最小限に抑えている。家具配置にも気を配り、住み慣れた自宅の部屋に近づけるよう配慮しているが、キーパーソンのご家族も高齢で家具の搬入が困難になってきている。	洗面台やエアコン、換気扇、ナースコールが備えてある。ベッドやテレビ、冷蔵庫、鏡台、筆筒等必要なものを持参している。折り紙の造花や家族の写真を飾っている。日中は見たいテレビや昼寝を楽しんでいる方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりのできること・わかることを全職員で把握・共有することにより、可能な限り、安全で自立して生活が送れるよう支援している		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0473100410		
法人名	社会福祉法人 涌谷町社会福祉協議会		
事業所名	グループホームゆうらいふ	ユニット名	ゆうひ
所在地	宮城県遠田郡涌谷町涌谷字新下町浦192		
自己評価作成日	令和4年 10月 21日		

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	令和5年1月13日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

高齢者福祉複合施設という特性と地域性もあり、民生委員や行政区長をはじめ、一般客の出入りがとても多く、単独のグループホームよりもその点が大変恵まれている。それらの利点を多に活用し日々のケアに取り入れる事を意識しながら、子供達を含むボランティアや学生の実習等も積極的に受け入れ、幅広い年齢層に親まれるホームを目指している。また、他事業所との事業など、人との交流の場が多いことから、認知症の方が地域で暮らしていけるよう家族を含めて理解して頂けるよう努め、高齢者施設だからと内にもったり、閉鎖的になる事が決まらず常に意識しながら取り組みをしている。あくまでも出来ない事を問題にするのではなく、出来る可能性を最大限に生かしていく事を大切に、入居者を中心として常に新しい取り組みを日々実践している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、涌谷町社会福祉協議会が運営する高齢者福祉総合施設「ゆうらいふ」の敷地内に2ユニットがある。面会は時間を決め面会室で家族や友人誰でも可能にし、馴染みの関係の継続に努めている。認知症カフェに参加して地域と交流を図ったり、社協が運営する子育て広場での母子との交流が入居者を励まし和ませている。運営推進会議メンバーの提案で、地区の災害協力員が避難訓練に参加している。職員は入居者の安全、安心な生活に視点を置き、晩酌を認めたり訪問診療を実施する等、入居者や家族の要望を実現している。目標達成計画の水害想定のマニュアルを作成し、非常食の備蓄リストも作成した。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで身体や精神の状態に応じて満足出来る生活を送っている。 (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、やりがいと責任を持って働いている。 (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者の意思を出来る限り尊重し、外出等の支援をする努力をしている。 (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、医療機関との連携や、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホームゆうらいふ)「ユニット名 ゆうひ 」

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を基本とし、ユニット毎に入居者の状態・季節・介護技術を踏まえた上で年間の個人目標を設定し、毎月確認している。また、目標を振り返る機会を会議時に行い、常にケアの向上に取り組んでいる。	年度初めに、ユニット毎に話し合い「関わりは丁寧、チームワークを大切に」等の分かり易い目標を定めている。入居者とは目線を合わせて会話し、職員の顔を見て安心できるように、支援に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	施設の研修室等に行っているサークル活動や各種会議の帰りに入居者の家族や知人が訪問してくれたり自然とつながりができている。また、町の文化祭や敬老会行事にも積極的に参加している事に加え、子供たちの慰問や実習、ボランティア活動等で交流は行われているが新型コロナウイルスの影響により最近では少し寂しい状態が続いている	行政区長や民生委員が来訪し、地域の情報を教えてくれている。認知症カフェの参加や月1回の折り紙ボランティアの来訪がある。涌谷高校へ認知症の出前講座をしたり、小学校の生徒とオンラインでゲーム等の交流が行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の勉強会や研修会に関わり、介護保険制度や各種サービス形態についての出前講座を行い、事業所での実践内容と経験を踏まえながら認知症ケアについての啓発活動に努めている。また介護職員初任者研修の講師として関わり認知症の理解に努めている。感染症の影響もあるが少しずつオンラインなどで再開している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこの意見をサービス向上に活かしている	今年度も、年間計画通り定期的に開催しているが、感染流行状況により書面開催へ切り替えたりしている。利用者や家族、地域代表の方、町の関係者で行事や運営に関して報告しサービスの向上に努めている。参加者の発案により地域の役員さん方との合同での避難訓練も実施した。	メンバーは町職員や行政区長、民生委員、家族で年6回開催している。会議では感染対策や防災、医療等に関する意見が活発に出されている。避難訓練に地区の災害協力員が参加してはの提案があり実現した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	生活保護を受給している方がおり、不定期ではあるが町の職員が訪問し様子を見に来てくれている。その際に近況報告を行い連携をとっている。また、町や町内の他事業所と協力し認知症カフェを行い意見交換を行なっている。処遇が困難な利用者への対応や利用料支払いが困難な方についても随時相談し助言を頂いている。	町と法人で職員の派遣交流が継続して行われており意思疎通が良い。遠方の家族の代理で介護保険更新で町へ出向いている。地域包括支援センターとは経済困難事例の相談や緊急入所の要請に対応し連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	常に入居者の立場から考え、やむをえず鍵やベント柵を使用する場合にも虐待につながるという認識を持ちケアにつなげている。現在該当する方はいないが、法人全体で組織する委員会で開催し、委員会主導で研修会を開催して身体拘束廃止を目指し取り組んでいる。	月1回、法人全体で虐待・身体拘束防止委員会を開催し、研修会の検討やマニュアルの見直し、事例検討等を行っている。入居者の行動は制限していない。急な立ち上がりや不安定な移動時など声を立てたり、抑止などはせず、見守り、寄り添うように努めている。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様、「常に自分に置き換えて考えたらどうなのか」と入居者の立場からケアを行うことにしている。定期的に内外部の研修会に参加し、虐待についての意識づけを定着できるようにしている。研修に参加できなかった職員に対しても伝達研修を行なっている。定期的に振り返りチェックシートを行い、虐待や身体拘束についての意識を高めている。	年1回、虐待の芽チェックリストを用いてユニット毎に検討している。忙しさの中で「ちょっと待って」や「無視する」ことが挙げられた。職員のメンタルヘルス研修会や囁託医の面談がある。管理者は年2回面談を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症の進行や身寄りがないなどの事情がある方について、行政や関係機関と連携し、成年後見人制度を利用している方が過去に入居されている。職員間でも関わりながら学ぶ良い機会となった。今後も権利擁護について研修会等で学び知識を得る努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	内容を省くことなく、認知症ケアに対する考え方と取組、緊急時医療連携体制の実際と個人情報の取り扱いについて説明し、理解を得たうえで同意をいただくことにしている。利用料金が気になる方が多いので丁寧に説明するようにしている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者が遠慮なく自分の思いを伝えられる雰囲気づくりに努めている。担当者が中心になりそれぞれの好みや思いに気付き、実践できるよう努力している。また家族の思いも大切に、行事や来訪時に問いかけ小さな意見でも話して頂けるように交流を深めている。	入居者から「晩酌したい」要望があり、主治医や家族と相談し実現した。それ以降、帰宅願望がなくなった。家族から「かかりつけ医（協力医）に訪問診療を行ってほしい」という要望があり、協力医と協議し実現した。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスの機会を設けている他、月に一度のユニット会議、臨時介護員会議（不定期）、全体会議にて職員に意見や提案を聞くようにして、より良いケアにつなげていくようにしている	職員提案のドライブや正月のおせち料理が実施された。食器洗い機や衣類乾燥機等を買換えた。遅番の30分繰り上げやシフトの調整が柔軟に行われ、働きやすい環境にある。資格取得や研修参加等支援している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	継続して取り組み熟成したシステムになるにはもう少し時間を要するが、人事考課制度を行い、全職員のスキルアップを目指している。各職種グレード別に取り組みと考課を実践し、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修・講習等に全職員が各自のスキルに合わせ、バランス良く順番に参加できるような体制をとっている。また、法人にて資質向上委員会を立ち上げ、年間の研修が計画・立案されているが最近ではオンライン研修が多い。		
14	(9)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県内で多くのシェアを持つGH協議会に加入しており、見学を含めた学習会や職員研修にリモート会議を含め参加するようにしている。他事業所の意見や経験を聞く貴重な時間であり、良い取組事例を現場に還元するように各自職員に周知しているが最近では参加できていない。	グループホーム協議会の研修会がオンラインで行われ、コロナ対策や最新の情報を得ることが出来た。N95マスクの使用が感染防止に役立っている。法人が感染対策の検査キットやマスク等の準備を迅速に行った。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	最初の面談の時点から、本人の思いを察知し、聞き出せるよう努めている。本人と向き合い、信頼関係を築けるよう取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談時間を十分にとり、不安や要望を聞き受け止めることで信頼関係を築けるように努力している。さらに本人と家族が望むケアに対し、本人の生活歴を伺いながら、事業所としてどのような対応ができるか理解していただけるようにしている。面会なども一律に制限せず、感染状況に応じて柔軟に対応している。最近では介護者も高齢である事が多く、課題が多岐に渡る事が多いと実感している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時間に時間をかけ、本人と家族の思いを確認し見極め、他のサービスの利用調整や提案を行うなど その時に合わせた対応に努めている。また、法人内の独自のサービスを契約、利用してもらいながら顧客満足度の向上を目指している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護をする側・される側といった一方的な見方をせず、ともに支えあい、同じ目線での関わり方を意識し職員間で共有するよう努めている		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	専門職として一方的に意見を押し付けず、本人・家族の思いを聞き受け止めることでともに支えていくという信頼関係を築けるように心がけている。要望に対して対応出来ることはすべて柔軟に対応している。		
20	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前と環境が極力変化しないように努め、本人の趣味・習慣・生活歴、役割等を継続できる環境を作っている。また協力していただく方々にも認知症を理解していただけるように働きかけている。友人などご家族以外の面会も受け入れるようにしているが、入居期間が長くなると次第に疎遠になるのが課題。	面会は、面会室を設け30分間、家族や友人等誰でも可能にして、多数訪れている。入居者の帰宅や外泊も認めている。受診時に外食して来る方や近所の美容室へ通っている方もいる。月1回馴染みの理美容師が訪れている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共通の趣味や役割活動を通じて、入居者同士が関わりを持てるよう職員が調整役となっている。また毎日のレクリエーションや行事等で一体感を感じられるよう努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院中も機会を得てお見舞いに行くなど関係性を大切にしている。退去後も折をみてご家族の話や相談事に乗れるよう、日ごろから信頼関係を築けるよう努めている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望・意向をくみ取れるよう、日々の関わりを持っている。認知症により訴え・要望が変化されてきていることがあっても家族に伝え、本人を主体としたケアを提供できるように話し合いを持っている	入居者に、何かしたい事や何か食べたい物を聴き、ラーメンやお好み焼き等の希望に込んでいる。意思表示の困難な方は、筆談や顔の表情から汲みとり、チラシでゴミ箱を作ったり雑巾を縫うなどしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談時にじっくりと話を聞く機会を持ち、なおかつ入居後も本人・家族とのかわりを深め、少しでも多くの情報を把握できるように努めている。それらをホームでの生活でも活かせるように支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前からの生活習慣を継続できるよう(起床後の掃除等)、各々の暮らし方を尊重し、残存能力を維持できるよう支援を行っている。		
26	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスやモニタリングで全職員が入居者の状態を把握できるよう努めている。本人主体の介護計画を念頭に置き、それらに本人・家族の要望を取り入れ反映できるようにしているが、コロナ禍により本人が満足出来るような行事などが行えていない葛藤もある。	担当職員から報告を受け、毎月カンファレンスを行い、3か月毎にモニタリングし見直している。本人や家族が安心して生活を送れることを基本としている。酸素療法が必要な方を家族の要望で受け入れ支援している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録システムや引き継ぎノートで入居者の状態把握をすばやく確認し共有できるようにしている。日々の心身の状態変化・気づき・水分・食事量・排泄面を介護記録システムへ時間毎に入力している。違う時間帯に勤務する職員もそれを確認することで情報共有が可能になっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	定期受診の際 提出する報告書以外にも必要時に応じ職員が同行するなど柔軟な対応をしている。できるだけ本人や家族の要望に応えられるよう情報を収集し、サービスの多機能化に努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	住み慣れた地域で安全で豊かな暮らしを楽しめるよう、地域の民生委員や行政区長、学校関連・ボランティアに働きかけ協力をいただきながら支援している		
30	(13)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事業所の協力病院のほか、本人や家族が希望するかかりつけ医を基本的には家族対応で受診している。その際も生活の様子の報告書を提出し、情報伝達を密にすることにより適切な医療が行われるようサポートしている、また、協力頂ける歯科や皮膚科への受診も行っている	家族の要望で、協力医の訪問診療を受けている方がいる。協力医は24時間対応である。歯科医が年1回検診に来訪し、治療が必要な方は受診している。法人の看護師が健康チェックや相談に応じている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同一法人内の看護師を配置し、日常的に入居者の健康管理や必要に応じた援助を行っている。介護職員とも相談や情報交換ができる密な関係を維持している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を含む環境の変化を最小限に抑えるべく、本人および家族の意向を確認し、医療機関(地域医療連携室)とも情報交換しながらできるだけ早期に退院できるよう支援している		
33	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として対応ができる段階の指針を定め説明を行っている。また、対応が可能な最大限のケアについての方針を職員間で検討し、意識の向上と援助方法の統一を図っている。途切れないケアを目指しタイミングが合えば同一法人の特養への移動も対応している	「重度化した場合における対応に係る指針」を入居時に説明している。現在看取は行っていない。重度化した場合、どこまで支援できるか家族と話し合い、希望に添う病院や特養など次の移転先への支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人全体で全職員対象に、外部で実施されている救急救命講習に参加している。またグループホームでも定期的に緊急時の対応としてAED取扱いや応急手当等の研修を行い技術の向上に努めている		
35	(15)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回災害を想定した実践的な訓練を実施している。近隣行政区長、地域災害協力員など地域の方々にも協力を頂く体制づくりに努め実際に参加して頂いている。以前当施設が水害による避難指示が発令され、避難した事もあり、近年水害リスクも高いので事業継続計画やマニュアルの見直し等も含めて検討中	夜間想定避難訓練を年2回実施している。併設の特養の職員も訓練に参加し、手順を決めている。車いすやシルバーカーの方も避難した。11月の訓練に地域の災害協力員が5名参加し、訓練の様子を見守っていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(16)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者それぞれの個性や性質を把握したうえで関わりを持っている。人生の先輩として敬うことを第一条件として職員間に周知している	呼び名は名前にさん付けで行っている。目線を合わせて丁寧に話しをしている。背後から肩や背にボディタッチはしないようにしている。入室する場合はノックを確認している。失敗時は速やかに処理している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望を上手く言い表せない方に対しても日ごろの関わりから表情や行動で察知できるように努めている。また複数の選択肢を設け入居者が自由に選ぶことができる環境も目指している		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれの一日の生活リズムを把握し、長年の習慣を継続できるように努めている。体調に合わせて食事時間や入浴の時間にも配慮している		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員の押し付けではなく、各入居者の個性やこだわりを尊重している。毎朝の服装も本人と一緒に選ぶようし、おしゃれすることの楽しさを感じていただけるよう支援している		
40	(17)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	各入居者が役割を持ち、準備・片づけを手伝って頂いている。職員が入居者に確認して週1回手作りメニューを設け、時期に応じた食材を取り入れ、その季節の食材を味わって頂けるようにしていたが、近年は高齢化や重度化による状態の低下で以前のように役割活動が困難になってきている。	ご飯と味噌汁は作り、おかずは業者のチルド食材を利用している。誕生日や敬老会等行事の際には要望を聞き、ちらし寿司や刺身など好みのメニューにしている。100歳の方2名の誕生日に祝い膳を用意した。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事量・水分量を記録につけ把握し、さらに排泄量や体重の変動にも気を配っている。毎月のメニューは、クックチル委託業者の栄養士がカロリー等考え、提供時に個々の状態に合わせて提供している。必要に応じて法人内の栄養士からも助言頂ける環境を整備している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けや洗口液、義歯消毒剤を使用し、口腔衛生の保持に努めている。自力で難しい方には残存能力を活用しながらの支援をしている。また法人で歯科医院と契約して定期健診を実施し、口腔ケアのアドバイスや早期受診等の対応を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(18)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各入居者の排泄のパターン・習慣を全職員で把握し、その上で誘導の声掛けを行っている。本人のサインを見逃さないことにより、状態に合わせて可能な限りオムツからパット、パットから布パンツへ移行できるよう支援している。本人の自立支援を可能にするためにも安易におむつを使用するような視点を持たないように職員へ意識づけしている。	自力でトイレで排泄する方は半数近くいる。車いすを利用したり、排泄パターンで声がけ誘導している。オムツや紙パンツ、パットの軽量化を図り、トイレ誘導することで失禁を少なくしている。夜間は見守りや足音等で支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	バランスの取れた食事や1日の中で乳製品の提供を行なっている。入浴時のマッサージやレクリエーション時に体を動かす機会を取り入れ、下剤を最小限に抑えできるだけ自然排便できるよう支援している		
45	(19)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しむように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	入居前からの習慣を大切に、入居者の希望の時間に添えるようにしている。入浴を拒む方にも時間を置いたり、職員を交代して声掛けを行うなどし、気持ちよく入っていたりできるように努めている。重度化により通常浴槽での入浴が難しい場合は、法人内の特別浴槽で入浴できるように調整し細やかなサービスに対応できるようにしている。	入浴は週2回とし、希望に応じている。午後の入浴としているが、晩酌を楽しみにして18時半頃に入浴する方がいる。好きなシャンプーや入浴剤を利用している。入浴が嫌いな方には時間をおいて声がけし、拒否する方はいない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣に合わせてながら日中のリズムを作り上げ、できるだけ本人の希望に沿った就寝時間の確保に努めている。(テレビ鑑賞や読書時間等)また眠剤を服用している方も徐々に減らしていく事を心がけている。ただ本人が安心感を得るために服用している方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を個々のケース記録に整理し、薬の内容や副作用について全職員が把握できるようにしている。服薬する際も、二人の職員で確認して間違いを防止している。薬の内容についても主治医の他、院外処方薬店の方に常時間い合わせ確認できる体制を確保している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節ごとの行事や日々の役割活動の中で一人ひとりが知識や生活歴を生かせるような機会を設けている。個々の好みや得意なことを気づき、引き出せるようにコミュニケーションを図っている		
49	(20)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人一人の希望に沿い、担当職員との個別外出やユニット全体での外出を企画立案している。町内の行事に積極的に参加し、地域の人々との交流を楽しんでいただいているが、新型コロナの感染症で回数は減ってしまっている。	涌谷町城山のぼん馬大会へ見学に行ったり、石巻の大判焼き店の開店に行ってきた。近くのスーパーやドライブに出かけている。ホームの面する道路沿いに見事な桜並木があり、暖かい日には散歩に行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いとして普段は職員が管理しているが、外出時には本人の小遣いとし所持していただき使えるよう支援している。中には家族了解のうえ、少額であるが普段から所持している方もおり、社会とのつながりを断ち切らないよう努めている		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望を取り入れ、電話のやり取りをできるように支援している。最近ではリモート面会にも力を入れており喜んで頂いている。また手紙を送る方はいないが、届いた手紙を本人に手渡し読んで頂くように支援している		
52	(21)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地よく過ごせるよう季節ごとに装飾を変え、作成も入居者とともにしている。何が快・不快なのかを探りだし、混乱を招くような刺激がないように努めている	リビングは日当たりが良い。天井の蛍光灯の色が温かみを感じる。壁や窓に正月飾りや干支の兎の折り紙が貼られている。レク活動の他、入居者同士の雑談やテレビ視聴、洗たく物量みなどをして自由に過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	以前は、炬燵を準備していたが、現在は身体機能が低下し和室に上がることで難しくなったため、ショートステイ専用部屋へ改築した。今の入居者様は一人になる寂しさを感じる方が多いので自然とリビングに集まって来られる。		
54	(22)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には馴染みの家具や小物類を持参していただき、環境の変化による不安や影響を最小限に抑えている。家具配置にも気を配り、住み慣れた自宅の部屋に近づけるよう配慮しているが、キーパーソンのご家族も高齢で家具の搬入が困難になってきている。	洗面台やエアコン、換気扇、ナースコールが備えてある。ベッドやテレビ、冷蔵庫、鏡台、筆筒等必要なものを持参している。折り紙の造花や家族の写真を飾っている。日中は見たいテレビや昼寝を楽しんでいる方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりのできること・わかることを全職員で把握・共有することにより、可能な限り、安全で自立して生活が送れるよう支援している		